２０２４年度一般選抜
小論文
≪問題用紙≫

次の文章は、坂本拓弥（2023）『体育がきらい』第３章・体育の先生がきらい「怖くても、ユルくても」の一部です。次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

先生の空回り、もしくは不幸なすれ違い

そもそも、体育の先生になる、もしくはなろうとしている人の多くは、体育が好きであることが多いはずです。確かに、体育が嫌いなのにあえて体育の先生を目指す人は、かなり珍しいでしょう。しかし、それでもなお「体育ぎらい」が存在していると言うことは、その原因を「ユルい」先生や怖い先生の責任だけにしておくことはできない、ということでもあります。次に見るように、体育の先生の大多数を占めるそのような「体育が好き」な先生もまた、実際には「体育ぎらい」に深く関わっている場合があります。

たとえば、よく言われることですが、体育が好きな先生は、「体育が嫌い」な生徒の気持ちを理解できないことがあります。前章で挙げた「恥ずかしさ」を例にしてみます。仮に、生徒がクラスメイトの前で踊ることを恥ずかしいと感じていたとしても、先生は、「大丈夫、恥ずかしくないからやってみよう！」と言ったりすることがあります（言っちゃいそうです……）。

このようなやりとりは、恥ずかしさに関わる状況に限られません。跳び箱を跳ぶことや水泳で水に顔をつけることが怖いときなどにも、多くの先生は生徒を励ますために、「怖くないから、やってみよう」とか「だまされたと思って、一回やってみよう」と言うことはないでしょうか。みなさんにも、このような言葉をかけられた経験があるかもしれません。

でも、実際に生徒は怖さを感じているわけですから、先生の「怖くないから……」という言葉を、そのまま素直に受け取れるとは思えません。むしろ、そのような状況によって、少なくない生徒が「体育ぎらい」への道を歩み始めてしまうのではないでしょうか。なぜなら、彼らの気持ちを代弁すると、「いや、私が実際に恥ずかしいとか怖いと感じてるんだから、先生の感覚を押しつけないでほしい！」といった感情を抱くと考えられるからです。ここから「体育ぎらい」までは、もう目と鼻の先です。

「体育が好き」な先生が陥りがちな問題は、まさにこのような押しつけとも捉えられる態度を、悪気もなく、いやむしろ親切心からとってしまうことにあると言えます。もちろん、そのような先生の態度と姿勢は、運動やスポーツの楽しさや面白さをなんとかして生徒に伝えたいという、情熱の現れと捉えることもできるでしょう。しかし、それは同時に、「体育が好き」なわけではない、もしくは「体育が嫌い」な生徒の目には、「体育が好き」な先生の「空回り」にしか見えないわけです。ここには、体育の先生と生徒の「不幸なすれ違い」があります。

そもそも体育を好きにさせる必要はある？

このようなすれ違いの背景には、生徒に「体育を好きにさせたい」という、体育の先生の思いがある場合もあります。みなさんに「体育を好きになってもらいたい」という思いを持ちながら授業を行っている先生が、少なくないと言うことです。

これは先生の立場からすると、一見当たり前のように見えます。だって、自分の教える教科を嫌いになってほしいわけはないですし、その授業を受ける生徒が好きになってくれたら、単純にうれしいはずです。それは確かにそうなのですが、でもそれって、ちょっと変なんです。なぜかというと、先生がうれしいからっていうのは、あまり重要なことではないからです。体育の授業は，先生がうれしかったり喜んだりすることを目指してやっているわけではありません。だとすると、体育の先生が生徒に体育を好きになってもらいたいと思って授業を行うことは、本当は全然当たり前のことではないことになります。

もちろん、多くの体育の先生はそんなことを承知の上で、あえて体育を好きにさせようとしていると思います。それはなんのためかと言えば、体育を好きになることによって、授業で行われるさまざまな活動に、生徒が積極的に取り組んでくれるようになると考えているからです。つまり、先生にとって重要なことは、生徒が体育を好きになることよりも、むしろ、それを通して多くの大切なことを経験し学んでもらうことなのです。たとえば、ほとんどの体育の先生は、きっと、新しい運動ができるようになる楽しさやうれしさや喜びを、生徒に感じてほしいと思っているはずです。

しかし、残念ながら、そんなことは生徒の立場からすると、知ったことではありません。むしろ、そのような先生の意図はよく見えませんので、ただただ、先生が自分たちに体育を好きにさせようとしている、としか感じられないかもしれません。それは先ほど論じたように、「好き」の押しつけにほかなりません。そのようにして、「不幸なすれ違い」が生まれると言ってもよいかもしれません。

坂本拓弥（2023）「体育がきらい」ちくまプリマー新書　p. 101-105

問 1　体育の先生と生徒の「不幸なすれ違い」とは、具体的にどのようなことか。
40 文字以内で答えなさい。

問 2　「そもそも体育を好きにさせる必要はあるか」。筆者の考えを踏まえて、あなたの考えを 400 字以内で述べなさい。